

筒形土偶の背景に向けて

－神奈川県の縄文後期前半期土偶の事例から－

高 橋 穎

- | | |
|-------------------|----------------|
| 1. はじめに | 4. 筒形土偶からの問題提起 |
| 2. 本論の視点 | 5. おわりに |
| 3. 縄文後期前半の神奈川県の様相 | |

1. はじめに

土偶から縄文人をどのように理解できるだろうか。縄文時代の様々な時代や地域において土偶はどのような役割を果たしていたのかという問題である。土偶は形態から容易に機能や用途を推測できること、使用状態を直接復元できるような出土状態や使用痕のようなものが乏しいこと、そのような土偶を必要とした精神的側面に関わる問題にアプローチするための理論や方法論も成熟していないことなどのいくつもの問題を含んでいることが指摘されている（藤本1983、小林1997、渡辺2001）。同様な問題を持つものとして、土偶を含む第2の道具（小林1996）や記念物（小林編1995）などの施設がある。

筆者はそうした資料から当時の人々の生活を説明するための理論や方法について考え、考古学的な分析を基本にして当時の集団や社会、精神的側面にどこまで迫ることができるかという問題を研究している（註1）。現在は資料集成、属性の観察とデータ化を進めている一方で、遺物と遺構を関連付ける視点や製作技術と集団と社会の関係、精神的側面と物質的要素の関係について検討している。そこで今回は神奈川県の縄文時代後期前半（主に堀之内式期）の土偶からいくつかの問題を考えてみたい。

2. 本論の視点

神奈川県の後期前半の土偶を扱う理由はこれまで神奈川県の縄文後期遺跡の整理作業に携わった機会があったこと、縄文後期の土偶研究が資料集成や基礎的な研究の部分で一定の効果をあげていることにある（註2）。それらの成果に基づき関東地方を中心に後期土偶の展開について簡単にまとめると以下のようになる。

①縄文時代中期末から後期初頭における土偶は関東地方からほとんど発見されておらず、わずかに東北地方のものと類似した土偶が北関東に出現する程度である（註3）。そして後期前半以

降徐々に土偶の出土量は増加する。分布は西日本にも広がる。

②関東の後期前半の土偶は主に三つの形態がある。それらは手足や胴部の形態の違いによって識別される。各形態の分布や系統、出土数には違いが見られる。関東全域に分布するが、中心となる地域がやや異なる。

以上のような後期前半の土偶の展開について考えていくために、基礎データの整理とその過程で気付いた問題について検討を行う。まず後期前半の神奈川県内の土偶を形態から二つに区別する。これは土偶の残存状態が必ずしも三形態の違いを指摘できるほどに良好なものではないということにより、今回はそのような破片の資料も対象にしているためである。次に土偶出土遺跡を集成して、遺跡分布や土偶の出土量を示す。さらに二形態の分布や出土量の比較を行う。そして、二形態のうち筒形土偶の型式学的な編年研究や、横浜市原出口遺跡20号住居址の事例を通じて神奈川県における筒形土偶の展開について検討する。

尚、本論での時間的枠組みは全般的に『縄文土器大観』(小林1989)に準拠するが、土器の細別や土偶の編年については適宜参照する文献を述べたうえでそれらも用いる。

(1) 土偶の形態

後期前半の土偶は主に三つの異なる形態がある。一つは筒形、二つめはヒト形、三つめは板状の土偶である。本論では後期前半期土偶の三形態を、筒形(図1-8~16)とヒト形(図1-1~7)の二形態に区別して県内の集成を行った。二つの形態は手足の有無や胴部の形状に大きな違いがある。以下形態的な特徴を記す。

筒形土偶は胴部の上方がやや細くなった円筒の形をしている。胴部の中身は空洞で粘土が詰まっている。さらに手足の表現がなく平らな底部によって自立する様子は筒状を呈する。そして胴部の上に顔面部を乗せるが、定形的な筒形土偶は顔面部がやや傾斜し、蓋のように中空の胴体の上に直に張り付いている。筒形の名称は、そのような作りを持つ土偶に対して「容器形土偶」と区別するために名づけられた(神林1943)(註4)。

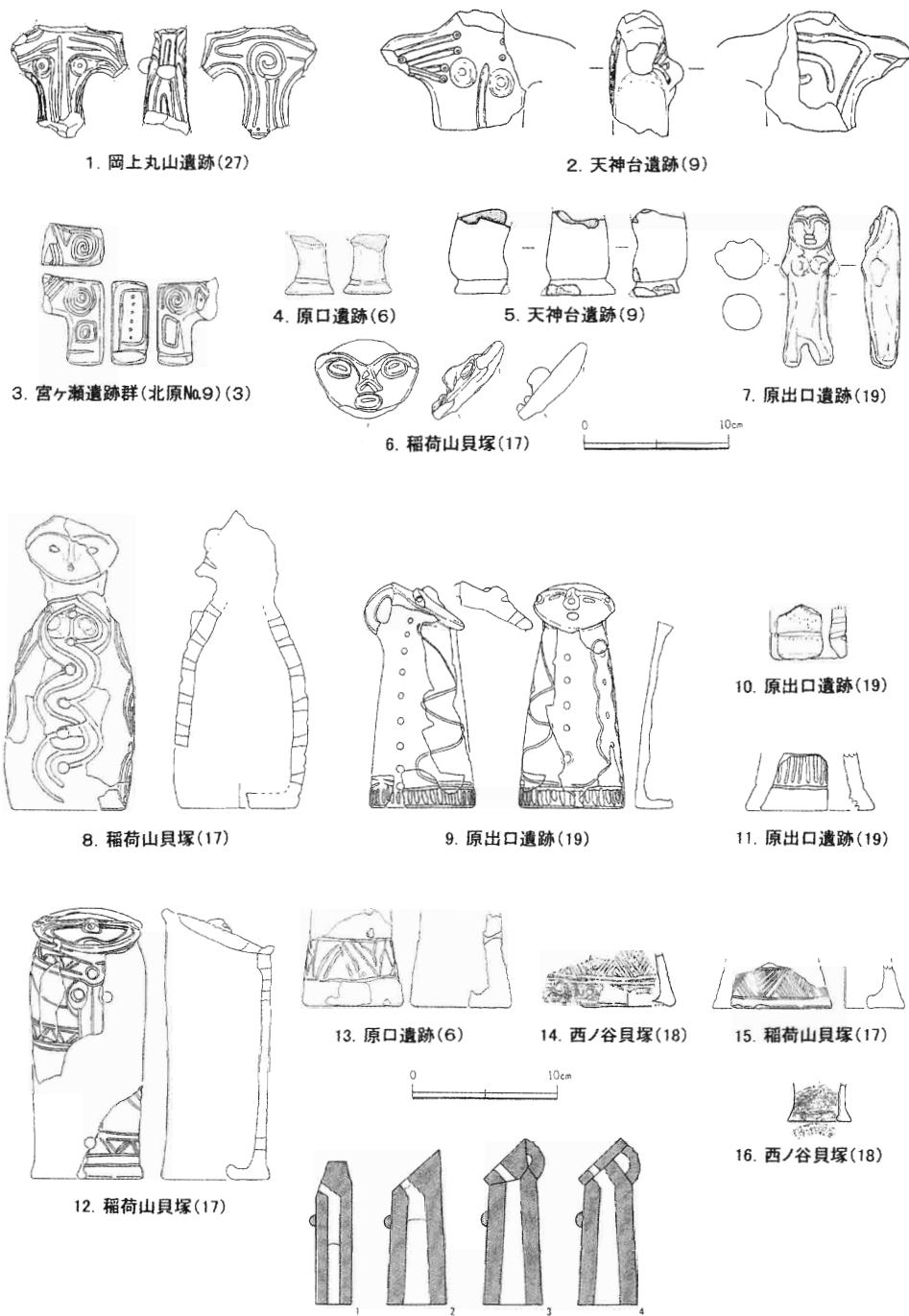
ヒト形は首や手足の表現がある土偶である。そのうち胴部が細身でどっしりと安定した下半身によって自立するものがあり、首は上方または斜め前に突き出て特徴ある顔面を支持する。この形態に対しては「ハート形土偶」の名称で用いられている。ハート形土偶は群馬県郷原遺跡出土の土偶(山崎義男1954)の顔面部を野口義曆氏が「ハート形」と称したのがこの名称の由来といわれている(植木1990)。

他には板状の胴部に手足や手のみが付く土偶がある(山崎和己1995)。筒形やヒト形が立体であることに対して板状は二次元的な表現の特徴がある。筒形やハート形に比べると事例は少なく、具体的なまとまりの把握にはまだ至っていない。板状の土偶は事例の少なさやその位置づけの問題を考慮してヒト形として扱う。

本論ではこのようにハート形土偶や板状の土偶に対して、胴部の作りや手足の有無を区別す

筒形土偶の背景に向けて（高橋）

ヒト形：1～7 () 内の数字は図2遺跡番号に対応



筒形形式の中空構造とつくりの変遷(植木1990より転載)

図1 筒形とヒト形

る立場から総称してヒト形を用いる。また破片資料という制約によって板状の土偶との識別が困難なことから板状の土偶もここに含めて扱いたい。よってヒト形の胴部形状はやや多様となる。

（2）土偶の形態に対する立場

土偶を見る手足の有無や胴部の形状の違いは何を意味するのだろうか。これまでに手足や胴部形状の違いについては「立像形」と「省略形」というようなデザインの違いとする見方や（能登・永峯1977）、文化や心性を異にする集団の違いが反映されているという見方がある（磯前1985・植木1990）。磯前順一氏は筒形土偶とハート形土偶の分布や発見数、形態や文様の多岐にわたる検討から、両者の背景に何らかの集団の違いを想定している（磯前1985）。植木弘氏も「筒形」や「ハート形」などに区別される土偶の形態を「外面形式」として集団の心性の違いが反映しているという仮説を明確に提示している。そして心性を異にする集団同士の関係が「外面形式」の分布に現れているとして、形式相互の時期的な関係や分布から集団の対立や共存といった背景を想定した（植木1990・1997）。

このように土偶の形態の違いに当時の何らかの違いが反映されているという考え方や、形態の違いが文化や心性などを異にする集団の存在を示しているという考え方には、土偶の形態をどう見て、どう分類するかということと関わっている。ここでは、今後この問題を検討していくためにも土偶の分布や出土数といったデータを整理したい。ひとまず本論では植木氏と同様に、土偶形態を製作者の所属する集団の心性や伝統の反映と仮定して、その土偶の分布や遺跡内で異なる形態の土偶同士が存在していたことについては、多様な集団同士の交流・交渉関係の存在を仮定しておく（植木1990）。

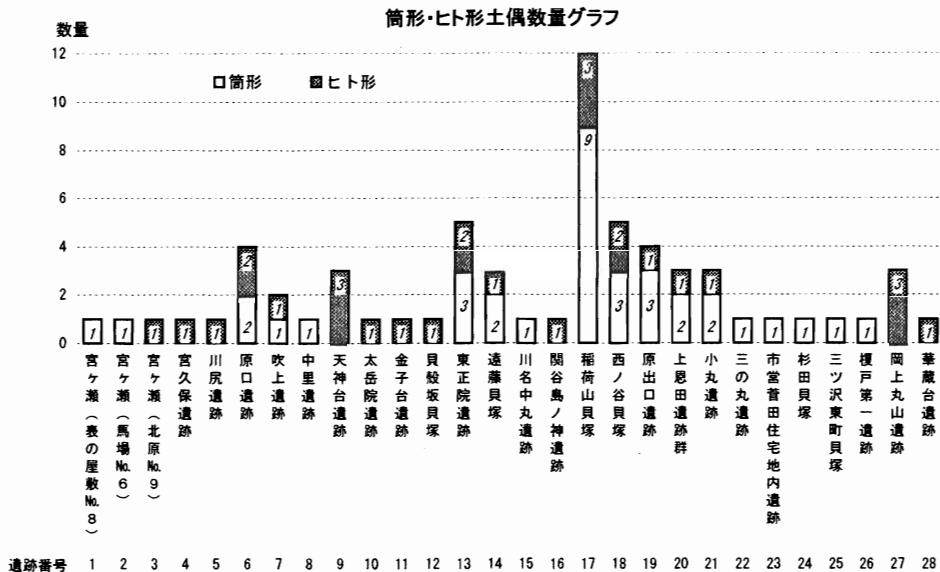
3. 縄文後期前半の神奈川県の様相

ここでは神奈川県内の後期初頭から前葉の発掘調査報告書を対象に土偶を集成した結果を述べる（註5）。主に出土遺跡の概要や分布、数量について示し、県内の土偶の様相を整理した。

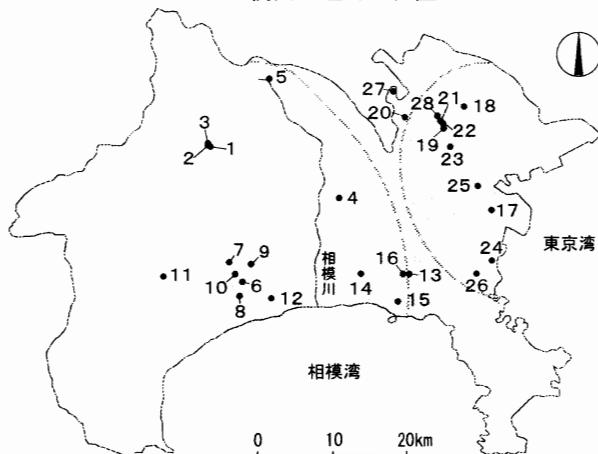
（1）出土遺跡概観（図2）

今回土偶出土遺跡として集成した遺跡は28遺跡である。神奈川県の後期の遺跡分布は大まかに見ると、丹沢山地や箱根山地を除くとほぼ全面的に発見されている（山本1990）。そのなかで土偶出土遺跡の分布は、東京湾岸沿いや下末吉台地、相模湾岸沿いの台地や大磯丘陵などにまとまりがある。さらに丹沢山中や内陸にも存在しているがまとまりには欠ける。時期的な傾向は堀之内1式期や堀之内2式期主体の遺跡が多い、一方で称名寺式期主体といえる遺跡は少なくこの時期の土偶と判断できるものはない（註6）。

筒形土偶の背景に向けて（高橋）



土偶出土遺跡の位置



後期前半期土偶の様相

土偶総数 64個	出土遺跡 28遺跡	出土遺跡の平均土偶数 2.3個
最多出土数 12個 (土偶総数の18%)	[筒形・ヒト形] 共存遺跡 8遺跡 (出土遺跡の29%)	
最少出土数 1個	[筒形・ヒト形] 共存遺跡出土数 38[25/13]個	
最少出土遺跡数 17遺跡 (出土遺跡の61%)	[筒形・ヒト形] 共存遺跡の平均出土数 4.8個	
筒形土偶総数 36個 (土偶総数の55%)	筒形単独出土数 11個	
筒形出土遺跡 18遺跡 (出土遺跡の64%)	筒形単独遺跡 10遺跡 (出土遺跡の36%)	
筒形出土遺跡の平均出土数 2個	筒形単独遺跡の平均出土数 1.1個	
ヒト形土偶総数 28個 (土偶総数の45%)	ヒト形単独出土数 15個	
ヒト形出土遺跡 18遺跡 (出土遺跡の64%)	ヒト形単独遺跡 10遺跡 (出土遺跡の36%)	
ヒト形出土遺跡の平均出土数 1.6個	ヒト形単独遺跡の平均出土数 1.5個	

図2 遺跡位置と筒形・ヒト形の出土数

出土遺跡の様相は住居址の他に貝塚や土器集中域を伴う場合が多い。神奈川の後期の遺跡は海岸部では貝塚、内陸の西部では敷石住居や配石を伴う遺跡が多いが、そのような遺跡と土偶出土遺跡の関係は検討されていない。

(2) 出土数 (図2)

集成した土偶は総数64点である。最大の出土数は稻荷山貝塚で12点出土している(註7)。次に東正院遺跡で5点、西之谷貝塚で5点、原口遺跡と原出口遺跡で4点となっている。このように土偶が複数出土している遺跡は28遺跡中11遺跡である。

出土数の地域的な傾向は東京湾岸や下末吉台地(遺跡位置17~28)で36点、相模湾岸の丘陵地(遺跡位置6~16)で23点である。さらにこれらの遺跡を東京湾岸に近い一群と相模川を挟んで東西に分けた相模湾岸の二つの群(遺跡位置6~12と遺跡位置13~16)に区別して見ると、三つの遺跡群の出土量傾向に類似点が見られる。各遺跡群は稻荷山貝塚、東正院遺跡、原口遺跡のような複数出土遺跡を含み、出土数1点の遺跡が近隣に分布するという傾向である。

東京湾岸と相模湾岸との出土数の違いが見られた要因の一つは稻荷山貝塚の出土数にある。稻荷山貝塚例を除いてみると、複数出土遺跡や出土数1点の遺跡が各地に大きな偏りなく散在する状況である。これらの出土遺跡数や出土点数のデータは、考古資料の形成過程などを考慮すると、当時の様相を反映しているとは必ずしもいえないだろう(註8)。当時よりも出土量は少なく示されている可能性が高い。また地理的な区分もここでは便宜的なものである。そのような条件を加味したうえで扱う。

他地域では後期前半期の土偶が1つの遺跡から数十点出土する長野県北村遺跡(平林他1993)などがある。それらの中心を占める形態はヒト形であり、筒形中心で大量保有といえる遺跡は発見されていない。神奈川においてまたは筒形土偶の中心地域においては、土偶を必要とする意識が少ないのでだろうか(註9)。この点を考えるにあたって、やはり関東における中期末から後期初頭の土器群に伴う土偶がないという状況や、その時期の土器群と系統関係にある「下北原式」(安孫子1981)が後期前半堀之内1式期の神奈川においては主体であるということを再認識しておく。

(3) 各形態の出土数 (図2)

全64点のうち筒形は36点、ヒト形は28点である。筒形とヒト形が共に出土する遺跡は28遺跡中8遺跡である。筒形が単独で出土する遺跡は10遺跡、ヒト形単独は10遺跡である。地域的に近接する遺跡群では東京湾岸は筒形24点、ヒト形12点と筒形が多く、相模湾岸では筒型10点、ヒト形13点とややヒト形が多く出土している。

筒形が出土する遺跡とヒト形が出土する遺跡はどちらも18遺跡と同じ程度である。東京湾岸と相模湾岸で比べても遺跡数はほぼ同じだが、ヒト形が相模湾岸に多く、筒形が東京湾岸に多

い。あくまで現状での結果にすぎないが、この点は神奈川県内での地域的な差異として捉えておく（註10）。

（4）小結

以上神奈川県の後期前半期土偶の集成から気づいた問題点を以下にまとめて記す。

①神奈川においても称名寺式期に土偶が知られていない。

②土偶は堀之内式期には県内のほぼ各地に分布する。

③神奈川の地域は土偶の出土数が多いとはいえない。

④筒形とヒト形の分布状況や出土数がやや異なる。

①③のような土偶が低調な事については、中期末あるいは中期後半にまでさかのぼって土偶の様相を考える必要があるかもしれない（註11）。

④の違いは東京湾岸と相模湾岸の遺跡で比較した場合に表れてくる。ヒト形の出土数は両地域ともあまり変わらないが、筒形の出土数は差がある。例えば内陸や山中の遺跡（遺跡番号1～5）を見てみると、全体的に出土数は少ないが、筒形が多いとはいえない。やはり東京湾岸に筒形が多いことが再確認できる（磯前1985）。筒形に比べてヒト形は県内に偏りなく散在している。相模湾岸や内陸、山中などの神奈川県西部方面では筒形よりも目立つ存在である。

筒形やヒト形の分布状況が異なっていたり、筒形が多いという地域的な傾向があるのに対して土偶出土遺跡がどのような環境に置かれ、どのような性質を有していたのかということは興味深い。この点を考えるには当時の地理的な環境や自然環境、そして遺跡群にみるような社会的な環境などを考慮しなければならないだろう。後期の遺跡は低地部分への進出に見られるような遺跡立地の変化や、小規模な遺跡がいたるところに散在していて遺跡数も多いなどの状況がある。県西部に見られる敷石住居址や配石遺構、沿岸部に見られる貝塚などから推測できる遺跡の役割との関係もあるのではないかと考えるが、現状では土偶出土遺跡が特定の機能を持つつかは不明である（註12）。

4. 筒形土偶からの問題提起

ここでは、筒形土偶の編年的な位置づけと原出口遺跡（石井1995）の事例について検討し、後期土偶の展開を捉える方法について考えた。

（1）編年的位置付け

筒形土偶は神林氏によってその内容が示されて後期の堀之内式の時期として認定された（神林1943）。分布の中心も南関東にあり、ハート形土偶や堀之内式土器との類似性があることもわかつってきた（江坂1960）。型式学的な検討から堀之内式1式・2式に細別され（磯前1985）、

植木氏は第1段階を称名寺式期に位置づける4段階の編年案を示した（植木1990）。土偶の胴部文様と土器文様の類似性、胴部の作りの変化に注目して、胴部の中空の作りを、底部からの繰り抜きによる方法から輪積み方法への時間的な変化と仮定し4つの作り（図1）を時間差として捉えた（註13）。その後加曾利B1式期における事例などをあげて、5段階の変遷を提示した（植木1997）。筒形土偶の時期幅を称名寺式～加曾利B1式に比定し、第5段階を加曾利B1式との共伴という根拠から設定した。

植木氏の編年で今後検討すべき点は、第1・2・3段階の土器編年との関係、第4・5段階の型式学的な検討などがあげられよう。第4段階が堀之内2式に伴うことは、筒形土偶の底部付近に横展開する文様が安定して施文されていることと堀之内2式の深鉢の胴部上半に同じく横展開する文様が施文されることの類似性によって肯定できる。

以上の事を踏まえて、編年にあてはめてみると、図1-8・10が第3段階、図1-11～16が第4段階に位置づけられる。

ここで問題となるのは図1-9原出口遺跡の土偶の位置づけである。原出口遺跡の土偶の断面が示す胴部の作りや口の表現、胴体のプロポーションなどは4段階のものといえる。文様構成も第4段階に主に見られる底部付近の横展開の文様が見られるが、モチーフが第4段階に一般的なものではない。胴部にも縦位に蛇行する沈線が施文されているが、この類似例は第3段階の稻荷山貝塚出土の土偶である。以上の理由により第3段階と第4段階の中間に位置づけておく。この土偶を含め原出口遺跡の事例は充分な検討をおこなう必要がある。

（2）原出口遺跡20号住居址の土偶出土事例の検討（図3）

遺跡から発見される土偶はごく細かな破片であり、同一個体と認識できる僅かな破片からの推定になる場合がほとんどである。接合関係については不明だが、概ね同一の貝層や同一の住居覆土内のものなど極めて近い距離での接合である。遺跡内の破片だけではほとんど完全な形にならない（註14）。そして、土偶破片の出土地点は主に貝層や土器集中部や遺構覆土とその周辺からの出土である。遺構覆土の場合も雑多な土器片の廃棄と同様な背景と考えられる場合が多く、特別な関係を指摘できる例は少ない。

そのなかで原出口遺跡20号住居址の事例（図3）は示唆に富む。床面から丸棒状胴部に手足のついたヒト形の土偶（図3-6）が1点（註15）と、他地域の土器群の要素を持ったほぼ完形に近い土器（図3-1～4）が4個体、注口土器（図3-5）が1個体出土している。さらに覆土にも床面の土器と類似する要素を持つ土器や、ほぼ同一時期の土器が出土している。そのうち覆土中に口縁部を伏せた状態で出土した土器（図3-7）の口縁部付近に筒形の土偶（図3-8）の破片があり、覆土中に接合する土偶の破片が散らばっていた。20号住居址は別の住居址との重複関係において新しい住居址であり、斜面部に立地する古い住居址よりも斜面上方に位置する。20号住居址は床面の厚い焼土の堆積から火災住居と考えられている。

筒形土偶の背景に向けて（高橋）

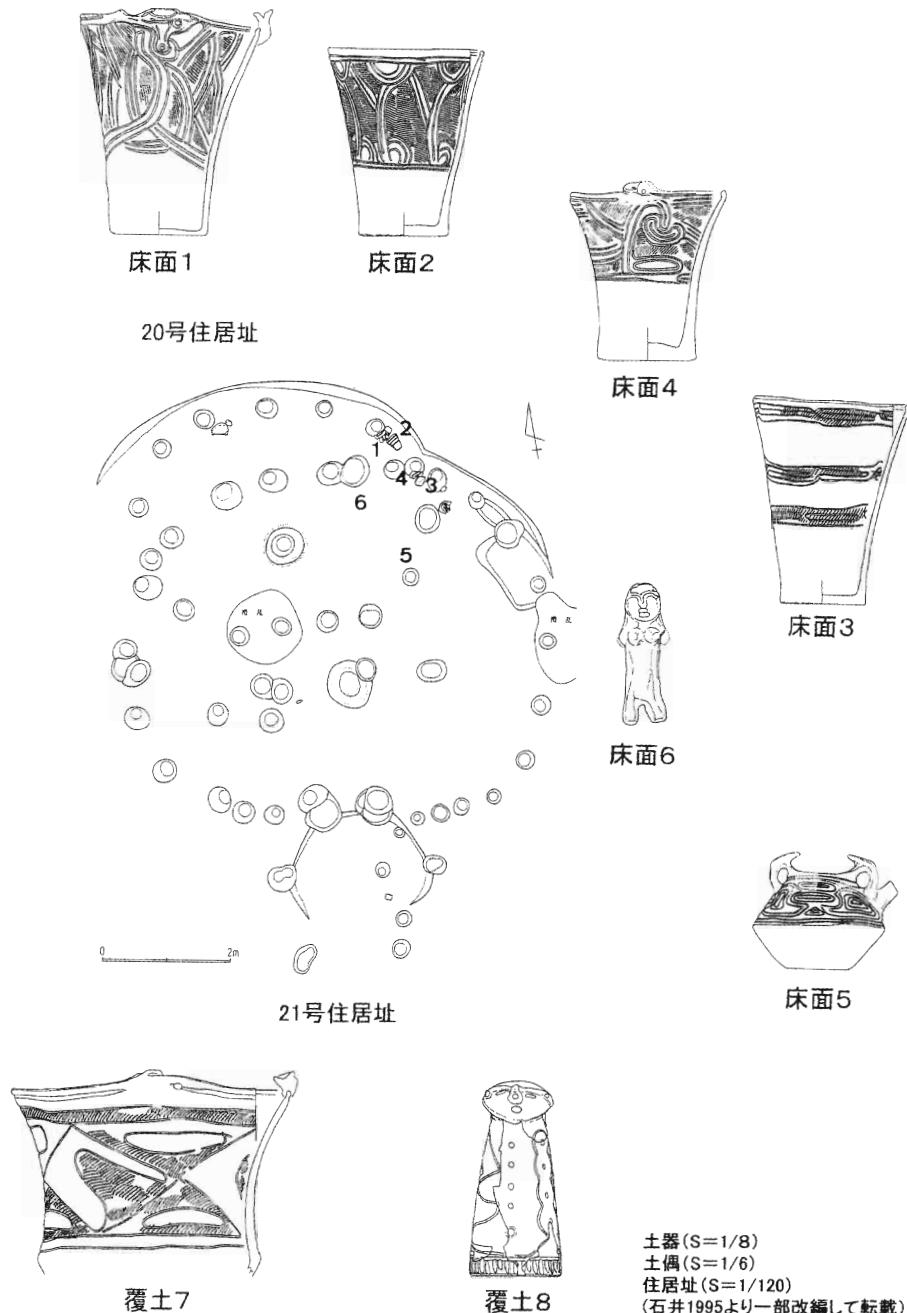


図3 原出口遺跡20号住居址の土偶出土事例

この事例の重要な点は3つある。

1つは床面の5個体の土器と胴部丸棒状ヒト形の土偶の関係である。石井 寛氏はこの土器群に東北や北陸の土器群との類似性を指摘している（註16）。

この土偶と5個体の土器は時期的にも同一とみなせるが、土偶の系統については問題がある。手足の表現からは、おそらく筒形と異なる背景で製作された可能性が推測できるが、胴部の形状や顔面部の形状は、筒形土偶の編年案（植木1997）によるところの第1・2段階のものに類似している。そこには共伴した土器に関する集団の影響を考えられるが、このような事例から、土偶の形態に集団の違いが反映されているかという問題を手足の有無や胴部形状の違いだけではなく、細部の形状や文様を含めた製作工程を分析することから考えていきたい（註17）。

2つめは二つの土偶の時期である。覆土から出土した筒形の土偶も床面のヒト形に近い時期を想定できる。この住居の覆土の土器も床面の土器に近い時期を示すものが含まれており（石井1995）、筒形土偶は堀之内1式期終末から堀之内2式期初頭に比定できる。これにより、筒形土偶編年（植木1997）第3段階と第4段階の中間は、おおよそ堀之内1式期終末から堀之内2式期初頭と考えられる。

3つめは土偶の用途または廃棄方法についてである。石井氏はこの出土状況に「特別な意味」があったとする。丸棒状胴部の手足を有する無文のヒト形土偶の機能・用途を考えるうえで「他地域」の要素を持つ複数の土器と「火災住居址の床面」で共伴していることは重要である。今のところ筒形土偶にこのような出土事例はない。両者の土偶には異なる用途があるのかもしれない（註18）。

以上3つの点を確認したが、土偶の位置づけを問題とするうえで1つめと2つめの点に注目して筒形土偶の第3段階と第4段階の事例についてさらに検討してみる。特に1つめの点は、筒形土偶の細部の形状や文様などから、製作工程の違いやそれらの選択性について土器と比較をしながら検討することの重要性を示す（鈴木正博1995）。土器との関係性は同じ土製品という点で製作者や製作集団などのあり方を考えるのに有効な視点である。

（3）土器と土偶の関係

称名寺式主体の遺跡では筒形土偶の出土はない。堀之内1式期には沿岸部の遺跡や貝塚などに筒形土偶の出土がある。そうした遺跡では関東東部の堀之内1式の様相を持つ縄文地文の土器が出土する。さらに原出口遺跡では東北や北陸の様相を持った土器が出土している。

このような事例から、他地域の様相を示す土器などが出土する遺跡に筒形土偶が出現する傾向があるのではないかと予測する。

そうした土器は堀之内1式期の細別（石井1993）から見ると堀之内1式の後半であり、安孫子氏のいう「下北原式」が主体を占めていた堀之内1式の前半の様相ではない。「下北原式」と土偶との関係が弱いという状況は「下北原式」が安孫子氏が指摘したように称名寺式の深鉢

からの連続性を持っていることに原因があると考えられる（安孫子1981）。

堀之内1式期の後半には堀之内2式期に一般化する深鉢の祖形が出現してくる。そのような土器群の展開と関係して筒形土偶も展開していくとすれば第3段階と第4段階の筒形土偶の違いと土器群の様相の変化に関連性が見出せるのかもしれない。

つまり手足の表現のないことや文様構成などの「外見上」は第3段階と第4段階の筒形土偶に連続性を指摘できるが、胴部の作り方や文様構成、モチーフなどの細かい属性のような「外見上では正確に伝わりにくい」属性に注目すると、第3段階の土偶は胴部のつくりや細部の形状、文様の施文が安定しない土偶が多く、分布も散漫である。それに比べて第4段階の土偶は関東西南部を中心にきわめて安定したスタイルをとる。胴部の作りや、文様構成、モチーフなどの統一がとれており、モチーフは深鉢土器に類似する三角形のものや、注口土器と類似する鋸歯状のものが見られる（註19）。こうした第3段階と第4段階の筒形土偶の様相の違いにはおそらく土偶や土器を取り巻く様々な背景の変化が介在している。

以上のように土器様相の変化に関連して筒形土偶が展開する第3段階と第4段階のあたりに原出口遺跡20号住居址のような土偶の出土状況があるということからも、土器や土偶の様相の変化には何らかの関係がある。その変化は土器や土偶の製作者や製作集団のあり方が関係している。そこで製作工程などの技術的な視点の分析は製作技術や集団の変質を明らかにすることができるよう。

5. おわりに

神奈川県の縄文時代後期前半期土偶の様相を検討した結果、筒形とヒト形が東京湾岸と相模湾岸で異なる出土量や比率で存在していた可能性が示された。しかしその傾向が集団構成などと、どのような関係があるかを検討するには至っていない。そこで筒形土偶の編年的な位置づけや原出口遺跡20号住居址の出土事例を検討した結果、筒形土偶の変容や広がり方は同時期の他地域の土器群と関係し、筒形の安定した展開は在地の土器群との関連性があることが考えられた。

この点に関しては土偶の製作工程を想定しながら「見た目で伝わる」と考えられる手足の有無などの属性と「見た目では伝わりにくい」と考えられる細部の形状や文様の属性を抽出して、両者の遺跡内・遺跡間でのあり方を示すことで、広域に展開する背景と地域的なレベルでのあり方を考えていくだろう。さらに土器の広がり方や文様、特にどのような土器の文様と類似するかといった点に注目することで土偶と土器の製作者または製作集団の存在を指摘できるだろう。例えば筒形土偶の内部の形状を作り出すには、「見た目」などではなく、土偶の製作工程のあり方を共有できる機会がなければ類似性は現れないであろう。製作機会を異にしても「見た目」の手足の有無を真似できるような関係とは異なり、製作工程を同じくする土偶の広がり

方は製作者あるいは製作集団の広がりや土偶の分配などが想定できよう。さらに製作工程や文様の施文順序を共にする土器の抽出を行い遺跡内や遺跡間の分析を進めることによって、甲野勇氏（甲野1953）に指摘されたような土器を作る部族と周辺部族との交易のあり方を遺跡と遺物によって具体的に検討できるかもしれない。また製作工程を異にする土偶や土器に注目することで遺跡内の異なる集団の存在についての仮説（小林1993）を検証できよう。

本論の内容は神奈川県内から出土した土偶に対して、これまでの論考や他の考古資料の分析や仮説に照らしながら土偶の様相を検討して解釈を進めたものである。今回は個々の土偶や土偶同士の関係についてはあまり言及していない。特にヒト形としているものは非常に多様であり、筒形との関係も一様ではないだろう。それらを説明するためには土偶同士の関係性を明らかにして位置づけていく型式学的な操作が必要になるだろう。土偶の様相の検討についてもこれまでの分析に対して未熟な理解で進めたためにかなりの誤解を含んだ内容であるかもしれない。今後はこれらの修正を行い、今回の作業によって気づいた課題も検討していく。本論の内容や問題点などについて多くの方のご指摘を受けられればとても幸いである。

謝辞 本論の掲載に至るまで多くの方から受けたご支援やご厚意は言葉で言い尽くせないものがある。横浜市歴史博物館の小倉淳一氏には資料見学に際して御配慮を受けた。小林達雄先生、石井 寛氏、小滝 勉氏、藤波啓容氏には常日頃からお世話になっており、本稿を草するにあたっても大変お世話になった。特に藤波氏と編集の小滝氏には、締め切りを越えての原稿提出まで懇切丁寧に御指導して頂いたことは今後も忘ることはできない。改めてこの場を借りて感謝の意を示したい。

註

- 筆者と同様な研究姿勢として阿部友寿氏の研究があげられる。阿部氏は渡辺仁氏の著作『縄文土偶と女神信仰』（渡辺2001）を対象にして、阿部氏自身が土偶の意味機能に迫るために「説明方法」を検討している（阿部2002）。特に文化人類学的な成果を駆使して土偶を取り巻く様々な事象の「関連性」の説明とその重要性について指摘しており、渡辺氏の著作と同様に注目できる。
- 後期前半の土偶研究のこれまでの成果と展望については上野修一氏がまとめているので参照されたい（上野1999）。上野氏は研究史を振り返り、今後の課題として時間的な位置づけや系統の把握に課題があることを指摘している。
- 例えば群馬県前橋市上川久保遺跡の土偶（能登・永峯1977）がある。この土偶について能登 健氏は縄文後期に関東地方に展開する筒形土偶の「祖形」としての位置づけを与え、形態状の類似性から石棒との関連性を指摘した。その後、植木 弘氏は刺突文様を理由に東北地方との関連を指摘しながら後期初頭称名寺式期に位置づけた（植木1990）。なお鈴木保彦氏はこの土偶を筒形土偶として扱うことに否定的な見解を述べている（鈴木1990）。
- その後、さらに中期中葉に胴部中空の筒状を呈する土偶が発見されたが時期や分布から系統的な連続性が否定されている（小林1977、能登・永峯1977）。

- 5 資料集成は主に『土偶シンポジウム栃木大会 関東地方後期の土偶シンポジウム資料集』(1995)（以下『シンポジウム資料集』とする）と『土偶シンポジウム栃木大会 関東地方後期の土偶シンポジウム発表要旨』(1995)（以下『シンポジウム発表要旨』とする）を参考にした。そしてシンポジウム以降の資料を若干集成した。尚、『シンポジウム資料集』の神奈川の集成(鈴木保彦1995)には後期中葉以降の土偶も含まれている。これについては、『シンポジウム発表要旨』に掲載された板状土偶を扱った山崎和己氏の指摘による1点と山形土偶を扱った森脇 淳氏の指摘による原出口遺跡出土事例を除いた7点を検討対象から除外した。
- 6 神奈川県内遺跡の時期的傾向としては後期中葉以降の遺跡は事例が極めて少ない(山本他2001)。
- 7 図1-8の稻荷山貝塚の筒形土偶は以前の発掘で出土したものであり、他の土偶とはやや離れた場所から出土している。今回はそうした事例も含めて稻荷山貝塚出土土偶としている。他に注意する点として、顔面部のみの土偶（図1-6）が出土しているが、これはハート形に典型的な顔面部表現としてヒト形に扱う。その理由は、①ハート形の顔面部は隆帯の貼付とその隆帯上の刺突で目と口を表現していること、②筒形土偶顔面部の目の表現は沈線であり、口の表現は穿孔であり胴部の中空部にまで貫通していることが挙げられる。
- 8 長岡史起氏は後期の遺跡分布を対象に当時の遺跡分布である「真の分布」が、現在発見されている遺跡分布である「見かけの分布」として現れてくる要因を長年の自然的な影響や現代の発掘調査体制などのあり方から説明している(長岡1989)。
- 9 堀越正行氏が堀之内貝塚の分析からこのような1遺跡の土偶保有数の問題を展開している(堀越1996)。
- 10 神奈川という範囲の中での地域的な差異については、鈴木徳雄氏が堀之内1式土器の検討から相模川の東西の違いを想定した(鈴木1984)。
- 11 当地域では石棒のような第2の道具や敷石住居や埋甕などが中期後半から連綿と存在し続けているのに対して土偶は見当たらなくなる。このような事象は、当時の社会や精神的な側面を探るうえで重要な視点を示してくれよう。
- 12 土偶の出土遺跡と非出土遺跡の検討は、土偶のような第二の道具と環状列石・巨木柱列・環状盛土のような記念物との関係を考えるきっかけになるだろうと考えている。第二の道具や記念物は当時の觀念的な側面の反映として見られ、遺物の分布、出土状況や出土量、遺跡内・遺跡間での属性分析、記念物自体の分析などの詳細な分析が未だ活発ではない。これらを統合して分析するための視点や方法を考え、それを実践して第二の道具や記念物を評価していくことを大きな目的としてあげておく。
- 13 この点については磯前氏も注目していた。磯前氏は植木氏が輪積みとして指摘するつくりを「もっとも発達したもの」、それ以外のつくりを「退化した」ものと捉えた。そして前者が中心となる「西関東海岸部」と後者が中心となる「他の周辺地域」といったような分布の「中心」と「周縁」の違いとして理解し、「他の周辺地域」に広がるものは「退化あるいは地域独自のものに変形しており個体間のばらつきが大きい」と指摘した(磯前1985)。これは重要な指摘であると考えている。関東地方に広がる筒形土偶の胴部の作りには地域差があるということであり、この点を重視して筒形土偶の属性分析の視点や方向性が検討できる。
- 14 土偶の残存状況については、土偶の機能・用途論と関係して古くから議論が展開してきた。この点に関する小野(1999)や(植木1999)を参考されたい。
- 15 この土偶は丸棒状の胴部形態に着目した場合に筒形土偶の祖形と見ることもできるが、手足の表現や胴部の作りから中空の意識を判断できること、無文であることなどからヒト形に含める。しかし、筆者はこの土偶の顔面部の角度や眉の表現は非常に筒形土偶に似ていることから、ヒト形や筒形といった区別を超えた属性分析を考えている。

- 16 石井氏は原出口遺跡20号住居址出土の4個体の「相模系朝顔形深鉢」に、従来の堀之内1式の「縦位懸垂の文様構造」とは異なる「横長のJ字状」を呈した「3帯の横位区画文」のあり方や、「縦位懸垂の文様構造」による区画が不明瞭になる点などの文様構成やモチーフ、沈線の描出方法などの幾つかの要素を総合的に捉えて、「十腰内系土器群」や「南三十稻場式土器」との関連性を指摘した。と同時に、これらの土器群をめぐる背景を検討して、「堀之内1式終末から堀之内2式初頭」にかけての変容の問題を整理している(石井1995)。
- 17 磯前氏は筒形とハート形土偶の細部の形状に見られる類似性について指摘している。両者に共通して見られる「後頭部把手」について、それを作る太平洋側と作らない日本海海側との地域差を見いだしている。筆者は、このような属性の選択によって、筒形やハート形といった手足や胴部の形態などの差を越えて細部の形態から地域的なまとまりを捉えられることは、両者の製作方法や製作集団を考えるうえで重要な事実であると考えている。磯前氏の指摘には筒形土偶内の変異を考えるだけではなく他の土偶も含めた分析の有効性が示されている。
- 特にヒト形で胴部が中空の造りを持つ土偶が中部地方を中心に分布しているが、これらの土偶を考えるにあたっても筒形との関係が問題になる面があるだろう。
- 18 さらに原出口遺跡の土偶の問題を考えられる事例として、東京都北区東谷戸Ⅱ遺跡のSK02号土坑の事例を挙げておく(中島他1994)。土坑覆土から、胴下部に隆帯が一巡しているほぼ完形復元できたヒト形土偶1点と堀之内1式期の「相模系朝顔形深鉢」(石井1993)などが出土している。これらの土偶の位置づけについては鈴木正博氏の「下位土偶」(鈴木1982)の考え方から検討すべき事例であると考えている。「下位土偶」とは、「素朴な飾りたてない様式に特徴があり、物流体系に組み込まれない用途を本来的な意義とするものである。下位土偶の形態は様々であるが、夫の各種の別は必ずしも帰属体系統を意識したものではない。寧ろ、住居址単位に代表される小集団ないしは個人に帰属される可能性が強い。任意の一遺跡に於いて発見された下位土偶は、夫の遺跡に直接関係を有した個人によって製作され、夫の製作者と直接関係を有した小集団ないしは個人のある目的を達成する為に存在したのである。従つて製作という行為あるいは過程そのものが呪術的な意義を持ち得るのであり、製品そのものの存在意義は、同一小集団ないしは個人への連係帰属に於いて成立する」とされる。
- 19 鈴木正博氏は堀之内2式の注口土器とハート形土偶、一部の筒形土偶に文様の類似性を指摘している(鈴木正博1995)。同じ後期の東北地方では深鉢土器の文様との類似性から土偶の文様が捉えられる(中村1995)。さらに、縄文中期において谷口康浩氏は深鉢と土偶との造詣や文様の関係性を指摘している(谷口1998)。特に勝坂式土器と有孔鍔付土器や人体の表現に見られる文様との類似性を指摘して、それら土偶を「勝坂系土偶伝統」として文様や造詣が後の時期の土偶に継続していることを見出した。さらに、勝坂式土器の終息と共に土偶と土器の関係が希薄になり、土偶が「曾利式土器や加曾利E式土器との間に、文様・造詣の何らの共通点をも有しない」と指摘している点は、その後の土偶の展開を考えるうえで極めて重要な指摘である。各時期・地域において土偶の製作に、あるいは文様にどのような背景や意味があったのだろうか。土器と土偶の関係が希薄になることと中期末から後期初頭の関東地方に土偶が低調になることは関係があるのだろうか。そして深鉢土器や注口土器と土偶の造詣や文様との関係が強くなることと後期土偶が増加することにも何か関係があるのではなかろうか。

引用・参考文献

- 安孫子昭二 1981 「縄文後期の土器 関東・中部地方」『縄文土器大成 第3巻 後期』講談社
 安孫子昭二 1997 「関東地方縄文後期の動態」『土偶研究の地平』土偶とその情報研究論集(1) 勉誠社
 阿部友寿 2002 「道具」としての土偶の位置－渡辺 仁著『縄文土偶と女神信仰』を読んで』『先史考古学論集』第11集

- 石井 寛 1993 『牛ヶ谷遺跡 華藏台南遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 X IV 横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛 1995 『川和向原遺跡 原出口遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 X IX 横浜市ふるさと歴史財団
- 石井 寛 1999 『小丸遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告25 横浜市ふるさと歴史財団
磯前順一 1985 「筒形土偶について」『常総大地』13号 常総大地研究会
- 市川正史・恩田 勇 1994 『宮ヶ瀬遺跡群IV 北原(No.9)遺跡(2) 北原(No.11)』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告21 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 植木 弘 1990 「土偶の形式と系統について～東日本の後期前半における三形式の土偶をめぐって～」
『埼玉考古』第27号 埼玉考古学会
- 植木 弘 1995 「筒形土偶の系譜とその周辺」『土偶シンポジウム栃木大会 関東地方後期の土偶シンポジウム発表要旨』土偶とその情報研究会
- 植木 弘 1997 「筒形土偶の系統とその周辺」『土偶研究の地平』土偶とその情報研究論集(1)勉誠社
- 植木 弘 1999 「遺物研究 土偶（機能論・用途論）」『縄文時代』第10号第4分冊 縄文時代文化研究会
上野修一 1997 「東北地方南部における縄文時代中期後葉から後期初頭の土偶について－ハート形土偶出現までの諸様相－」『土偶研究の地平』土偶とその情報研究論集(1)勉誠社
- 上野修一 1999 「遺物研究 土偶（後期土偶）」『縄文時代』第10号第4分冊 縄文時代文化研究会
- 江坂輝弥 1960 『土偶』校倉書房
- 大野雲外 1910 「土偶の形式分類について」『人類学雑誌』第26巻 第296号 東京人類学会
- 小野美代子 1999 「遺物研究 土偶（総論）」『縄文時代』第10号 第4分冊 縄文時代文化研究会
- 岡本 勇 1979 『神奈川県史資料編20 考古資料』神奈川県
- 岡本 勇他 1986 『古代のよこはま』横浜市港北ニュータウン埋蔵文化財調査団編
- 恩田 勇他 1997 『宮ヶ瀬遺跡群VII 表の屋敷(No.8)』かながわ考古学財団調査報告19 かながわ考古学財団
- 川上久夫他 1976 『港南台』神奈川県埋蔵文化財調査報告9 神奈川県教育委員会
- 神林淳雄 1943 「筒形土偶について」『人類学雑誌』第58巻 第6号 日本人類学会
- 甲野 勇 1953 『縄文土器のはなし』世界社
- 小林達雄 1977 「祈りの形象 土偶」『日本陶磁全集 第3巻 土偶・埴輪』中央公論社
- 小林達雄監修 1989 『縄文土器大観 第4巻 後期 晩期 続縄文』小学館
- 小林達雄 1993 「縄文集団における二者の対立と合一性」『論苑 考古学』坪井清足さんの古希を祝う会 天山舎
- 小林達雄編 1995 『縄文時代における自然の社会化』季刊考古学 別冊6 雄山閣出版
- 小林達雄 1996 『縄文人の世界』朝日選書
- 小林達雄 1997 「縄文土偶の觀念技術」『土偶研究の地平』土偶とその情報研究論集(1)勉誠社
- 坂本 彰他 1975 『横浜 緑区史』資料編第1巻 緑区史刊行委員会
- 坂本 彰他 2003 『西ノ谷貝塚』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告33 横浜市ふるさと歴史財団
- 杉山博久 1985 『秦野市史』別巻考古編 秦野市
- 鈴木次郎他 1995 『宮ヶ瀬遺跡群V 馬場(No.6)遺跡』かながわ考古学財団調査報告4 かながわ考古学財団
- 鈴木徳雄 1984 「関東西部における縄文後期前半の土器様相」『王子台遺跡とその周辺』東海大学文化部連合会考古学研究会

- 鈴木正博 1982 「埼玉県高井東遺蹟の土偶について」『古代』第72号 早稲田大学考古学会
- 鈴木正博 1995 「「土偶インダストリー論」から観た堀之内2式土偶—土偶の編年的位置は土器から、土偶間の動特性は土偶から—」『茨城県考古学協会誌』第7号 茨城県考古学協会
- 鈴木保彦 1972 『東正院遺跡調査報告』神奈川県教育委員会・東正院遺跡調査団
- 鈴木保彦 1990 「筒形土偶」『季刊考古学』第30号 雄山閣出版
- 鈴木保彦 1995 「神奈川県」「土偶シンポジウム栃木大会 関東地方後期の土偶シンポジウム資料集」土偶とその情報研究会
- 竹石健二他 1986 『川崎市麻生区岡上小学校遺跡調査略報』日本大学文理学部史学研究室
- 谷口康浩 1998 「土偶型式の系統と土器様式—勝坂系土偶伝統と中期土器様式との関係—」『土偶研究の地平』土偶とその情報研究論集(2)勉誠社
- 寺田兼方他 1993 『遠藤貝塚(西部217地点)』藤沢市西部開発地域内埋蔵文化財発掘調査団
- 永井正憲 1985 『関谷島ノ神西遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- 中島広顕他 1994 『西ヶ原貝塚Ⅱ・東谷戸遺跡』北区埋蔵文化財調査報告第12集 北区教育委員会
- 中村良幸 1995 「北上川流域周辺の動向」『土偶シンポジウム栃木大会 関東地方後期の土偶シンポジウム発表要旨』土偶とその情報研究会
- 長岡文紀他 1987 『宮久保遺跡Ⅰ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15 神奈川県埋蔵文化財センター
- 長岡文紀 2002 『原口遺跡Ⅲ』かながわ考古学財団調査報告134 かながわ考古学財団
- 長岡史起 1989 「南関東における縄文時代後期の遺跡分布—見かけの分布と眞の分布—」『神奈川考古』第25号 神奈川考古同人会
- 能登 健・永峯光一 1977 「呪的形象としての土偶」『日本原始美術体系3 土偶・埴輪』講談社
- 橋本昌幸 1988 『市営菅田住宅地内遺跡発掘調査報告』横浜市埋蔵文化財調査委員会
- 平林 彰他 1993 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書110-北村遺跡』長野県教育委員会
- 藤巻幸雄・石坂茂 1996 「群馬県出土の土偶—その変遷と地域的様相—」『群馬県埋蔵文化財調査事業団研究紀要』13 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 藤本 強 1983 「総論」「縄文文化の研究 9」雄山閣出版
- 堀越正行 1996 「堀之内貝塚出土の土偶」『市立市川考古博物館年報』第23号 市立市川考古博物館
- 松田光太郎他 2001 『稻荷山貝塚』かながわ考古学財団調査報告131 かながわ考古学財団
- 村上吉正・吉垣俊一 1997 「中里遺跡(No31) 西大竹上原遺跡(No32)」かながわ考古学財団調査報告30 かながわ考古学財団
- 森脇 淳 1995 「東京湾西岸地域の諸様相」『土偶シンポジウム栃木大会 関東地方後期の土偶シンポジウム発表要旨』土偶とその情報研究会
- 山崎和己 1995 「板状土偶とその他の土偶」『土偶シンポジウム栃木大会 関東地方後期の土偶シンポジウム発表要旨』土偶とその情報研究会
- 山崎義男 1954 「群馬県郷原遺跡出土土偶について」『考古学雑誌』第39卷第3・4合併号 日本考古学会
- 山本暉久 1990 「3 縄文時代中期と後期の遺跡分布」『神奈川の考古学』第1集 神奈川県埋蔵文化財センター
- 山本暉久・長岡文紀・恩田 勇・松田光太郎 2001 「神奈川県における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会
- 渡辺 仁 2001 『縄文土偶と女神信仰』同成社